

## バタン湾の漁業の現状

漁獲量の減少に対して地元の漁業者が手をこまねいていたわけではない。2000年ごろからは、定置網の数を制限したり、その配置を規制したりする地方自治体が出てきた。バタン湾の内湾漁業の中心地の一つは、ニューワシントン市にあるピナモカン（Pinamuk-an）というバランガイ（村のような最小の行政単位）であるが。このバランガイは、バタン湾内に砂が堆積してできな砂州上の集落であり、土地生産性が低く、市の中心部とは小さなボートで行き来する。漁業以外の産業はほとんどない。2010年ごろ、このバランガイの漁業者が、ピナモカン小規模漁業者組合（Pinamuk-an Small Fisherfolks Association：PSFA）を自主的に組織した。組合といっても日本の漁業協同組合のように共同販売のようなものをする組織ではなく、漁業規制を話し合ったり、マングローブ林の回復のためのボランティア活動をする組織である。私たちは、ピナモカンの漁業者関連の人々を4つのグループに分けて見ていた。第一のグループは、PSFAのメンバーではない漁業者である。第二のグループは、PSFAのメンバーではあるが、定置網を持っていない漁業者である。第三のグループは買い付け業など、漁業関連の仕事をしている人々である。第四のグループはPSFAのメンバーである定置網を持っている漁業者である。第一、第二、第三のグループの人々は、ピナモカンに住居を持っている住民であるが、第四のグループ50人のうちで、ピナモカンの住民は、50人中わずかに18人であり、残りの漁業者は他の地域に住みながら、ピナモカンの周辺で漁業を行っている。ティバッコーという定置網は、漁獲物の取り上げが容易で、1日の作業時間が2時間ほどですむので、他の仕事との兼業で漁業を行うことができる。聞き込みによる毎月の収入は第三のグループが最も高く、平均で、9,047p フィリピンペソ/月で、これに第四のグループが続く(8,689 フィリピンペソ/月)。第一、第二のグループの平均収入は、それぞれ、5,275 フィリピンペソ/月、5,347 フィリピンペソ/月であり、第一、第二グループと第三、第四グループの収入に大きな格差がある。しかし、いずれのグループの平均値も、国際貧困ライン1日1.9ドルを下回り、どのグループでも、30%以上が、フィリピン政府から貧困認定されて給付を受けている。

バタン湾には4つの市が面しており、多くのバランガイがある。地域の特性によって、地域の漁業者の漁業に対する思いは様々である。漁業の将来について悲観的で、できれば転業したいと考える人もいれば、漁業を継続したいと考える人もいる。漁業について、より細かい規制の導入と罰則の強化などトップダウン的な改善の必要を強調する人もいれば、現行の規制の順守やごみの投棄や環境改善のためのボランティア活動など、ボトムアップ的な改善を主張する人もいる。様々なバランガイがある中で、ピナモカンの漁業者は、漁業を継続したいとする人々と転業したい人々が、規制導入に積極的な人と消極的な人が拮抗している。ピナモカンでインタビューした200人の内、98人が漁業者間に対立があると答えたが、その内71人は、そうした場合、地域が共同して問題解決にあたると答えた。そのような事例として21人がPSFAの活動をあげ、13人が会議や集会をあげた。彼らは、マングロ

ーブ林の再生活動も行っており、放置された養殖池などにマングローブの植林を行っている。13名がマングローブの植林を共同体の活動として挙げた。違法な漁業として68人が挙げたのは、他人の漁具から漁獲物を盗むことであり、37人が規制よりも細かい網目の漁網を使うことを挙げた。この時点で、すでにケーブルテレビやワークショップなどを通じてストックエンハンスメント（資源増殖 stock enhancement）の情報は流していたが、ストックエンハンスメントという言葉を知っているのは、200人中わずかに13人であった。しかし、その内容を説明すると、194人がその活動に参加したいと答えた。また、82人がその対象種として、ブラックタイガーを挙げた。種苗放流の期待される効果として、184人が収入の増加を挙げたが、126人はそれに加えて、地域の連携の強化を挙げた。

ピナモカンで行われた PSFA の集会には何回か参加した。集会はア克蘭語 (Aklanon) で行われるので、何を言っているのか私にはわからない。日本で行われる同種の集会に比べて、積極的に意見を述べる人が多い。発言者に男女の偏りはない。あるとき、一人の女性がとても激しい言い方で意見を述べた。通訳してもらったところ、漁業規制について、いつでも刺し網が規制対象になり、定置網については規制が緩やかである。これは不公平だというものだった。これには一理ある。どんな漁業も不適切に行えば資源を圧迫する。刺し網も、あまり長いものを使ったり、水路全体に張れば大きな資源圧迫となる。しかし、これは定置網についてもいえることである。どんな漁法が何をどのくらい漁獲しているのか、実態がわからなければ適切な規制はできない。その発言内容よりも、こうした発言を積極的に一般の人がすることに驚いた。日本には見られない。フィリピン社会は面白い社会で、政治の中核に近づくと腐敗や不正があるが、バランガイの長 (Barangay captain, バランガイは本来、船の意味なので、船長という語感) の選挙はとても民主的で、この地域では、半数近くのバランガイ・キャプテンが女性である。こうした発言を記録していけば、日本ではなかなかとらえにくい漁村の情勢の意識変化も含めて、深いところで意識の変化を追えるのではないかと思った。

私たちは、現在、Hunet ASA(アジアの水産増殖の発展を支援する人の輪)を中心として、個人的な資金によって、フィリピンでエビ放流事業を続けようとしています。最終的には地域の人たちの負担によってこの事業を継続し、やがては資源や環境が回復して、放流も必要なくなることを理想としています。そのような活動によって、沿岸環境や地域資源を自ら管理・保全しながら利用していくための地域のコミュニティができると考えています。ここで紹介したエビの放流以外にも、地域コミュニティで運営する定置網や、観光と漁業をセットにした様々な提案によって、資源管理能力の高い豊かな漁業コミュニティを途上国の沿岸に作っていく活動をしています。こうした、活動に興味があり、支援したい方は HunetASA 事務局にお問い合わせいただきたい。

(2018)